

## アジア・太平洋研究センター主催講演会

日 時：2008年11月27日（木）

場 所：名古屋キャンパス J棟1階 特別合同研究室

発表者：坂元ひろ子（一橋大学大学院社会学研究科教授，社会学部教授）

テーマ：中国民国期の漫画雑誌——上海モダンガールと戦争——



東アジアの思想・文化は、19世紀後半から様々なレベルにおいて東アジア内部で連鎖していた。もちろん、この連鎖は、欧米世界とも連動する知的循環のなかに位置付けられるものであった。この世界大の連鎖の中から近代西洋の新しい概念が東アジアにおいて誕生し定着していった過程は、山室信一『思想連鎖としてのアジア』（岩波書店，2001年）がすでに明らかにしているところである。

しかし、この思想・文化の連鎖は、高度に専門的で学術的な概念だけに限定されるわけではない。少なくとも、講演内容からすれば、そう言い切れる。なぜなら、漫画雑誌という社会的で庶民的な文化の次元においてさえ、この世界大の連鎖が広がっていたからである。たとえば、アメリカで創刊された代表的な漫画雑誌 *Puck*（パック）は、東京、ソウル、上海の同時代の社会文化にも影響を与え、それぞれの地域で *Puck* を模した漫画雑誌が発行されていた。つまり、漫画雑誌でさえ、ニューヨーク、ロンドン、パリ、東京、ソウル、上海をほぼ同時期に一直線に結ぶような文化的存在だったのである。とりわけその象徴的事例が、モダンガールという新しい概念とその表象のされ方であった。第一次世界大戦後に誕生した和製漢語モダンガール（北澤秀一『女性』1924年）は、中国において「摩登」と音訳され、1920年代後半以降の漫画雑誌に盛んにとりあげられるようになった。

初期の漫画雑誌を代表する『上海漫画』（1928年創刊）には、躍動感溢れるモダン

ガールが描かれている。「踊る」モダンガール、「泳ぐ」モダンガールといったように身体を動かす女性を表現することは、士大夫（注：彼らは身体的な動きよりも知識・頭脳を重んじる）的な儒教倫理への根本的な批判であった。モダンガールを描いていた男性画家たちは、この新式の彼女たちを揶揄することもあったが、やがて受け入れるようになり、モダンガールとは対照的な存在であった女工たちも、モダンガールを模倣してファッションをささやかに楽しむようになった。

その後『上海漫画』は1930年に『時代画報』（1929年創刊）に吸収されていったが、モダンガールは変わることなく描かれ続けた。ただし、世界恐慌後の日本における頹廃現象の影響をうけて、中国でも「色情文化」が広まり、モダンガールにはエロティシズムと退廃性が付け加えられるようになった。堅実で社会性の強い左派系誌は、西洋文明批判の意味を込めて、そうしたモダンガールを嘲笑の対象として描くようになった。

こうした時代環境の変化の下で当時を代表する、いや当時におけるほぼ唯一の女性漫画家が、梁白波（ペンネーム BON）であった。彼女は、男性から再び揶揄されるようになった女性たちが再び連帯感を抱けるようなモダンガールを描き始め、男性が表出する裸体の女性像にも積極的に応答していった。

1930年代前半といえば、満洲事変や国共内戦を想起するまでもなく、戦時色が次第に濃くなっていった時代である。しかし、漫画雑誌で表象され始めた以上のようなモダンガールとそこに込められた社会心理も、当時の日常生活の実情を示すものであった。戦時色だけではとらえきれない都市文化の広がりについても、しっかりと認識しておく必要がある。

とはいえ、1937年の日中戦争以後は、「救亡」と「抗日」の意識が徐々に社会全体を覆うようになった。日中戦争初期の『救亡漫画』（1937年創刊）からはモダンガールが消え、それはつまるところ、彼女たちが公的に見放され、華美・贅沢といった感覚が社会的な基盤を急速に失っていったことを意味した。漫画のなかの女性は、もっぱら難民か蹂躪された被害者として描かれるようになっていった。ただし、梁白波は『抗戦漫画』（1938年創刊）でモダンガールを凛々しい女性兵士として、あるいは国産品を愛用する「責任感をもった奥さん」として描くことで、戦争プロパガンダとしての漫画とは一線を画し続けた。この事実も、我々は忘れてはならないだろう。

（文責 中村元哉）